ベルリン弦楽ゾリステン／プロムナード・コンサート

四声部のためのソナタ（テレマン曲）

1 第1楽章：アフェットゥオーソ ―― [1'18"]
2 第2楽章：アレグロ ―― [2'51"]
3 第3楽章：ヴィヴァーチェ ―― [2'32"]
4 **G線上のアリア**（組曲第3番 ニ長調より）（J.S.バッハ曲） ―― [5'13"]
5 **ボッケリーニのメヌエット**（弦楽五重奏曲 ホ長調 作品13の5より）（ボッケリーニ曲） ―― [3'43"]
6 **アダージョ ハ短調 K.546**（モーツァルト曲） ―― [3'24"]
7 **フーガ ハ短調 K.546**（モーツァルト曲） ―― [3'54"]
8 **アンダンテ・カンタービレ**（弦楽四重奏曲第1番 ニ長調 作品11より）（チャイコフスキー曲） ―― [6'03"]
9 **ノクターン**（弦楽四重奏曲第2番 ニ長調より）（ボロディン曲） ―― [7'37"]
10 **弦楽のためのアダージョ 作品11**（バーバー曲） ―― [8'39"]
11 **シチリエンヌ**（パラディス曲） ―― [2'37"]
12 **"菊"**（弦楽四重奏曲「菊」より）（プッチーニ曲） ―― [6'06"]
13 **子守歌**（弦楽四重奏曲のための）（ガーシュウィン曲） ―― [8'03"]

ボーナス・トラック Bonus Track

14 **愛の挨拶 作品12**（エルガー曲） ―― [3'41"]
SALUT D'AMOUR, Op.12 (Elgar)
15 **3声のカノン ニ長調（パッヘルベルのカノン）**（パッヘルベル曲） ―― [4'59"]
CANON A 3 ON A GROUND IN D MAJOR (Pachelbel)

ベルリン弦楽ゾリステン

●安永 徹（リーダー）／ベルンハルト・ハルトーク／トマシュ・トマシェフスキー／アレッサンドロ・カッポーネ：第1ヴァイオリン●アルミン・ブルンナー／真峰紀一郎／マドレーヌ・カルッツォ：第2ヴァイオリン●ヴォルフラム・クリスト／ジークベルト・ユーバーシュール：ヴィオラ●イエルク・バウマン／リヒャルト・ドゥヴェン：チェロ●クラウス・シュトール：コントラバス

●Recorded : 5-8 February 1989 Siemens Villa(Berlin)/ 14 15 Recorded :1993 ●Producer : Christfried Bickenbach/Motohiko Nakada/●Balance Engineer : Wolfgang Gülich/Akira Ikeda/● Special thanks to Ernst Rothe(EMI ELECTROLA), Ki-ichiro Mamine/●Photo by R.FRIEDRICH

SONATA À VIOLINO I & II, VIOLA E VIOLONO (Telemann)

1 1st Movement: Affettuoso

2 2nd Movement: Allegro

3 3rd Movement: Vivace

4 AIR FOR G STRING (from Suite No.3 in D major, BWV.1068) (J.S.Bach)

5 MENUET (from String Quintet in E major, Op.13 No.5) (Boccherini)

6 ADAGIO 7 FUGUE IN C MINOR, K.546 (Mozart)

8 ANDANTE CANTABILE (from String Quartet No.1 in D major, Op.11) (Tchaikovsky)

9 NOTTURNO (from String Quartet No.2 in D major) (Borodin)

10 ADAGIO FOR STRINGS Op.11 (Barber)

11 SICILIENNE (Paradis)

12 "CRISANTEMI" (from String Quartet) (Puccini)

13 LULLABY (from String Quartet) (Gershwin)

PHILHARMONISCHE STREICHERSOLISTEN, BERLIN

TORU YASUNAGA, BERNHARD HARTOG, TOMASZ TOMASZEWSKI

ALESSANDRO CAPPONE – Erste Violinen

ARMIN BRUNNER, KIICHIRO MAMINE, MADELEINE CARRUZZO – Zweite Violinen

WOLFRAM CHRIST, SIEGBERT UEBERSCHAER – Bratschen

JÖRG BAUMANN, RICHARD DUVEN – Violoncelli

KLAUS STOLL – Kontrabass

魅せられたる邂逅

柳田邦男

私にとって、ベルリン弦楽ゾリステンとの邂逅は、ベルリンへの国際電話がきっかけだった。

1985年の秋も深まった文化の日に、NHKのFM放送が「クラシック最前線」という4時間の特別番組を組み、そのなかで私は、海外で活躍する日本人演奏家たちに、次々にスタジオから国際電話をかけて近況を聞くインタビュアーの役を引き受けた。そのときインタビューの対象になった演奏家たちの1人に、ベルリン・フィルハーモニー交響楽団の第1コンサートマスターになって間もなかった安永徹さんがいた。

午後のナマ番組だったから、ベルリンは早朝だった。しかも安永さんは、ベルリン・フィルの演奏旅行から帰ったばかりだったにもかかわらず、疲れの片鱗も感じさせないはずんだ声で、愉しいトピックスをいろいろと語ってくれた。「ドイツ国内を演奏旅行するときには、貸切りの食堂車付き特別列車で移動するんです。楽団員たちはまるでピクニック気分で飲んだり食べたりしながら、和気あいあいで旅をするんですから、こんな愉しいことはありませんね」といったぐあいにである。ベルリン・フィルというと、カラヤンの指揮する舞台での荘重なイメージしか持っていなかった私にとって、そうしたトピックスは、とても新鮮に響いた。《ああ、ドイツの演奏家たちは生活をエンジョイするなかに音楽をとけこませているんだなあ》と思ったものである。

のちにドイツで出版された『オーケストラーヘルベルト・フォン・カラヤンとベルリン・フィルハーモニー』という本を安永さんからプレゼントされ、そこに挿入された楽団員たちの舞台外での数々のスナップ写真——楽屋でチェスを囲んでいるところとか機内の客席でひょうきんにトランペットを吹いてはしゃいでいるところとか——を見たとき、私はドイツの楽団や演奏家たちに対し、気軽に世間話のできる友人のような親近感を抱いた。素顔のスナップというのは、いいものである。

話はFM番組での国際電話に戻るが、あれこれインタビューによる会話がはずむうちに、安永さんは、「今月下旬には、日本に帰って各地で演奏会を開くんです。ベルリン・フィルなどベルリンの3つのオーケストラで仕事をしている気心の合う連中で弦楽合奏団をつくっているんです。弦の好きな者だけで集まろうやというのが趣旨です。興味がありましたら聴いてください」といった。

その「弦の好きな者だけで」といったときの安永さんの声がとても爽やかだったので、私はその年12月11日、東京の人見記念講堂で開かれたベルリン弦楽ゾリステンの演奏会に出かけた。プログラムの第1曲、パッヘルベルの《カノンとジーグ》が奏でられ始めたとき、私はこの曲へのかねてからの思い入れがあったことも重なって、たちまちこの合奏団のつくりだす弦の妙なるハーモニーの虜となっていた。演奏会の冒頭から情感がゆさぶられ胸が熱くなってくるというのは、めったにないことだった。曲目は、モーツァルト、メンデルスゾーン、ヴォルフと進み、最後のバルトークの《ルーマニア民族舞曲》が、これまたすばらしかった。30秒から長くて1分半という超ミニの、民俗調豊かな舞曲7曲を、折りたたむように積み重ねていく演奏は、軽妙洒脱といおうか。私はこの曲を聴くのははじめてだったが、あまりの愉しさに、《バルトークにはこんな曲もあったのか》と昂奮を覚えたほどだった。そして、「気心の合う連中で」とか「弦の好きな者だけで」とは、こういう音づくりのことだったのかと納得したのである。

3年後の1988年11月にベルリン弦楽ゾリステンが再び日本にやって来たとき、待ちかねていた私はカザルスホールに2度も足を運んだ。11月16日の曲目のなかで、プッチーニの《弦楽四重奏曲「菊」》に出会ったときには、この合奏団ならではの繊細で甘美な曲をうまく選んでくるものだなあと、あらためて感服し、さらにアンコールでレスピーギとバルトークが奏でられると、私はもう歓喜していた。そして11月28日のバッハ《フーガの技法》全曲演奏では、こういう難曲への挑戦もするのかと唸ったものである。

それにしても、安永さんがリーダーを務めるベルリン弦楽ゾリステンの、あの愉しさ、

あったかさ、端整さ、洗練された美しさは、どこから来るのだろうか。安永さんは最近、若いヴァイオリニストの卵のためのいわば教本をプライベートにつくっていて、そのはじめのところに、次のように書いている。「今までに、音楽を聴いていて、感動して、感激のあまり涙が出てきて……という経験をお持ちの方はたくさんいると思います。どうして感動するのでしょう。自分の中に、その音楽のすばらしさに反応するものがあったからですね。……一番大切なことは、演奏する人が、その弾く曲を、又は聴く曲を好きであるかどうかです。……そういう感じで音楽に接すると、音楽をとても身近なものに感じることができ、それが音楽の自然な表現ができるための要素であることに気がつくと思います」――この文章に接したとき、私の脳裏には、舞台の表でも裏でも真に音楽を愛し愉しんでいるドイツの演奏家たちの素顔をとらえたスナップ写真が浮かんできて、それらが安永さんの文章と重なり合い、なぜ私がベルリン弦楽ゾリステンに魅せられているかの謎が解けたのだった。

『ベルリン弦楽ゾリステン』――ライナー・ノート　　**鈴木陽子**(ケルン在住ジャーナリスト)

『ベルリン弦楽ゾリステン』は、西ベルリンの3つの主要オーケストラ、ベルリン・フィル、ベルリン放送交響楽団、そしてベルリン・ドイツ・オペラ管弦楽団の優れた音楽家を主体として、1973年に結成されました。結成当時のドイツ語の名称は『Deutsche Streichersolisten, Berlin』でしたが、ベルリン・フィル第1コンサートマスターの安永徹さんがリーダーになった頃から、メンバーの大半がベルリン・フィルの弦楽奏者になり、名称も現在の『Philharmonische Streichersolisten, Berlin』に変わりました。また結成当時の基本メンバーの数は、現在より2人少なく、10人でしたが、チェロが1人であることからレパートリーに制約を受けるため、数年前から、大きな編成の時には第1ヴァイオリンとチェロを1人ずつ増やし、12人にしています。このCDのレコーディングには、第1ヴァイオ

リン4、第2ヴァイオリン3、ヴィオラ2、チェロ2、コントラバス1の12人が参加し、所属オーケストラ別ではベルリン・フィル9人、ベルリン放送響1人、ベルリン・ドイツ・オペラ管2人となっています。特筆すべきことは、上記3つのオーケストラの第1コンサートマスターが3人、加わっていることです。

『ベルリン弦楽ゾリステン』はすでに長い歴史をもつグループで、メンバーの顔触れなどはいくらか変わりましたが、演奏に対する基本的な姿勢は、結成以来まったく変わっていません。『ベルリン弦楽ゾリステン』は、『ゾリステン』つまりソリスト集団で、その特性を一言で表現するなら〈各メンバーがソリストとしてのキャラクターを保ちながら、同時に室内合奏団の性格をも兼ね備えた弦楽アンサンブル〉といえます。指揮者なしで演奏する『ベルリン弦楽ゾリステン』は、各メンバーの音楽的な感性や表現力を大切にし、全員が自発的に音楽をつくり上げてゆく集団です。日頃、オーケストラで演奏しているメンバーが「大編成オーケストラとはひとあじ違う、室内合奏団ならではの音楽を表現したい」という意欲をもって集まったものです。その演奏は、響きの美しさだけを追求するのでもなければ、ミスのない演奏だけを目指すのでもなく、演奏者自身の内面から溢れ出る音楽の流れや息遣いを、自然に表現することを重視しているように思われます。

『ベルリン弦楽ゾリステン』のレコーディングは10年ほどのブランクの後、1989年から再開しました。このCDは1989年2月に西ベルリンで、最初のCDと同時に録音されたものです。この時レコーディングした曲は、50曲以上のレパートリーの中から『ベルリン弦楽ゾリステン』が自ら選りすぐった愛着の深い得意な作品ばかりです。一足早く1989年秋に発売された1枚目のCDには、レスピーギの《リュートのための古代舞踏曲とアリア第3番》、トゥリーナの《闘牛士の祈り》、シューベルトの《5つのメヌエットと6つのトリオ》、レーガーの《叙情的なアンダンテ「愛の夢」》などが収められています。

『ベルリン弦楽ゾリステン』のCDは日独共同制作で、『東芝EMI』が企画し、西ドイツの姉妹会社『EMIエレクトローラ』がレコーディング・ディレクター、ミキサー、そしてア

シスタントの３人のドイツ人スタッフと録音機材を提供して実現しました。

レコーディング・ディレクターもミキサーも経験豊富なベテランで、特にミキサーのヴォルフガング・ギューリッヒさんは、これまで26年間『EMIエレクトローラ』でミキサーとして働き、全盛期のカラヤン／ベルリン・フィルをはじめ、ベーム、ケンペ、バーンスタイン、ヨッフム、テンシュテット、ムーティ、マゼールなど、世界のスター指揮者とのレコーディングを数多く手がけたマイスターの中のマイスターです。

このレコーディングは西ベルリン市南部にあるギリシャ神殿風の正面をもつ館『ジーメンス・ヴィラ』のホールでおこなわれました。この館は1914年に建設されたもので、1920年にドイツの総合電機コンツェルン、ジーメンス社が買い取り、同年、敷地内に自社のオーケストラのためにホールを建てました。このホールは『ジーメンス・ザール』と呼ばれ、戦前、戦中から、コンサート会場として使用された他、数多くの音楽録音がおこなわれてきました。例えばフルトヴェングラー指揮ベルリン・フィルなど、ベルリンのオーケストラをはじめ合唱団、ダンス・オーケストラ、そしてマレーネ・ディートリヒなどもここでレコーディングしたことがあるそうです。今日ではベルリン交響楽団の練習場としても使われています。古い館の大広間といった感じの美しいホールで、白い壁に金色の線の装飾が施され、天井の中央には明かり採りのステンドグラスがはめ込まれています。面積はステージを含めて407㎡で、聴衆200人を収容できる広さです。ミキサーのギューリッヒさんはこのホールの音響にも精通していますが、ここは申し分ない録音ホールだと話していました。

前述の通り、『ベルリン弦楽ゾリステン』では、西ベルリンの代表的オーケストラの第１コンサートマスターが３人、第１ヴァイオリンを弾いています。

まず『ベルリン弦楽ゾリステン』のリーダーで、第１ヴァイオリンのトップは安永徹さんです。安永さんは1951年、福岡生まれで、1977年にベルリン・フィルのメンバーとなり、1983年11月から第１コンサートマスターを務めています。『ベルリン弦楽ゾリステン』のメ

ンバーになったのは1978年で、1983年１月頃からトップで弾いています。

ベルンハルト・ハルトークさんは1949年に西ドイツのビーレフェルトで生まれました。1980年、豊田耕児氏の後任としてベルリン放送響の第１コンサートマスターに迎えられ、現在に至っています。

トマシュ・トマシェフスキーさんは1951年生まれで、ポーランドのチェホヴィツの出身です。1982年以来、ベルリン・ドイツ・オペラ管の第１コンサートマスターを務めています。

もう１人の第１ヴァイオリン奏者はアレッサンドロ・カッポーネさんです。カッポーネさんは1957年にルクセンブルクで生まれました。ベルリン・フィルに入団したのは1980年で、第１ヴァイオリンのメンバーです。

第２ヴァイオリンのメンバーは全員、オーケストラでは第１ヴァイオリン奏者です。

アルミン・ブルンナーさんは1945年、スイスのバーゼル生まれ。1970年にベルリン・フィルに入団し、第１ヴァイオリンのメンバーです。『ベルリン弦楽ゾリステン』に参加したのは1976年です。

『ベルリン弦楽ゾリステン』の紅一点は、マドレーヌ・カルッツォさんです。スイス生まれのカルッツォさんは1982年にベルリン・フィル初の女性メンバーとして入団し、第１ヴァイオリンのメンバーになりました。カルッツォさんは女性にベルリン・フィルへの道を開いた先駆者です。

真峰紀一郎さんは1941年、東京生まれ。1970年から現在まで、ベルリン・ドイツ・オペラ管の第１ヴァイオリン奏者として活動しています。1973年からはベルリン・フィルの演奏にも頻繁に加わり、日本への演奏旅行にも毎回同行しています。『ベルリン弦楽ゾリステン』に加わったのは1977年で、楽譜を調達したり管理したり、アンサンブルの庶務一般を引き受けています。

ヴィオラ奏者は２人とも、ベルリン・フィルのメンバーです。

ヴォルフラム・クリストさんは1955年に西ドイツのハッヘンブルクで生まれ、ベルリン・フィルの第1ソロ・ヴィオラになったのは22歳の時です。

ジークベルト・ユーバーシェールさんは1930年生まれで、今日ではポーランド領となっているシュレジア地方南東部の出身です。1957年にベルリン・フィルに入団し、既に在籍30年を経た古参メンバーです。

チェロ奏者も2人とも、ベルリン・フィルのメンバーです。

イェルク・バウマンさんは1940年、ベルリン生まれ。1966年にベルリン・フィルのメンバーとなり、1977年以来、ベルリン・フィルのソロ・チェロ奏者を務めています。バウマンさんとコントラバスのシュトルさんは『ベルリン弦楽ゾリステン』の結成メンバーで、渉外事務などアンサンブルのマネージャーの仕事を担当しています。

リヒャルト・ドゥーヴェンさんは1958年生まれで、西ドイツのケルン出身。ベルリン・フィルに入団したのは1986年です。

コントラバス奏者はクラウス・シュトールさんです。1943年生まれで、1965年にベルリン・フィルに入団し、2年後に次席コントラバス奏者になっています。前述の通り、『ベルリン弦楽ゾリステン』の結成メンバーで、チェロのバウマンさんと共にマネージャー役を務めています。

以上が、このCD録音に参加した『ベルリン弦楽ゾリステン』のメンバーです。全員がオーケストラに所属しているため、スケジュールの調整が難しく、多少、入れ代わることもありますが、西ドイツ国内やヨーロッパの短期間の演奏旅行では、基本的にいつもこのメンバーで演奏しています。演奏会は年間約20回で、これまでドイツ国内はもとより、ソ連を含むヨーロッパ、及びオーストラリアのほとんどの主要都市に招かれ、好評をもって迎えられています。日本へは、このCDの発売時点までに既に4回の演奏旅行をしており、1990年12月には5回目の訪日が予定されています。

けでもたとえば弦楽四重奏曲が何と約100曲、弦楽五重奏曲となるともっと数が多い。そのうち、ヴァイオリン2、ヴィオラ2、チェロ1のタイプが10数曲しかないのに対して、ヴァイオリン2、ヴィオラ1、チェロ2の五重奏曲が100曲以上もあるのは、彼自身、一世を風靡するほどのチェロの名演奏家だったことと関係があるだろう。それらはしかし、やや類型的なこともあって取り上げられる機会は必ずしも多くないが、その中にひとつ、飛び切り有名なページがある。「ボッケリーニのメヌエット」として世に知られるこの曲、弦楽五重奏曲ホ長調（作品13の5）の第3楽章である。

●アダージョとフーガ ハ長調 K.546(モーツァルト)

この曲はヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト（1756～1791）が1783年に作曲した「2台のピアノのためのフーガ、ハ短調」K.426を、のちに弦楽合奏用に編曲し、さらにそれへの導入部として新たにアダージョを付け加えたものである。編曲とアダージョの作曲が行なわれたのは1788年の6月、すなわち、まさにあの「三大交響曲」作曲のさなかであった。深い情感を湛えたアダージョ、バッハへの傾倒を物語る4声の厳格なフーガ。どちらもモーツァルトの隠れた(？)傑作と呼ぶにふさわしい。

●アンダンテ・カンタービレ(チャイコフスキー)

ここからの4曲は、いずれも弦楽四重奏のための作品をアレンジしたものである。

「アンダンテ・カンタービレ」は1871年、チャイコフスキー（1840～1893）31歳の年に書かれた弦楽四重奏曲第1番ニ長調の第2楽章。人一倍スケールの大きなチャイコフスキーの音楽は、弦楽四重奏という器には不向きだったきらいがあるが、この楽章は例外中の例外で、オーケストラ用そのほかの編曲でも広く親しまれている。それもひとえに、ロシア民謡を素材にしたすばらしく美しいメロディのお陰だろう。チャイコフスキーはこの節(ふし)を、1869年の夏、ウクライナのカメンカ村に滞在した折、たまたま一人の職人が口ずさむのを

けでもたとえば弦楽四重奏曲が何と約100曲、弦楽五重奏曲となるともっと数が多い。そのうち、ヴァイオリン2、ヴィオラ2、チェロ1のタイプが10数曲しかないのに対して、ヴァイオリン2、ヴィオラ1、チェロ2の五重奏曲が100曲以上もあるのは、彼自身、一世を風靡するほどのチェロの名演奏家だったことと関係があるだろう。それらはしかし、やや類型的なこともあって取り上げられる機会は必ずしも多くないが、その中にひとつ、飛び切り有名なページがある。「ボッケリーニのメヌエット」として世に知られるこの曲、弦楽五重奏曲ホ長調（作品13の5）の第3楽章である。

●アダージョとフーガ ハ長調 K.546(モーツァルト)

この曲はヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト（1756～1791）が1783年に作曲した「2台のピアノのためのフーガ、ハ短調」K.426を、のちに弦楽合奏用に編曲し、さらにそれへの導入部として新たにアダージョを付け加えたものである。編曲とアダージョの作曲が行なわれたのは1788年の6月、すなわち、まさにあの「三大交響曲」作曲のさなかであった。深い情感を湛えたアダージョ、バッハへの傾倒を物語る4声の厳格なフーガ。どちらもモーツァルトの隠れた(？)傑作と呼ぶにふさわしい。

●アンダンテ・カンタービレ(チャイコフスキー)

ここからの4曲は、いずれも弦楽四重奏のための作品をアレンジしたものである。

「アンダンテ・カンタービレ」は1871年、チャイコフスキー（1840～1893）31歳の年に書かれた弦楽四重奏曲第1番ニ長調の第2楽章。人一倍スケールの大きなチャイコフスキーの音楽は、弦楽四重奏という器には不向きだったきらいがあるが、この楽章は例外中の例外で、オーケストラ用そのほかの編曲でも広く親しまれている。それもひとえに、ロシア民謡を素材にしたすばらしく美しいメロディのお陰だろう。チャイコフスキーはこの節(ふし)を、1869年の夏、ウクライナのカメンカ村に滞在した折、たまたま一人の職人が口ずさむのを

聞いて知ったと言われる。

●ノクターン(ボロディン)

原曲はアレクサンドル・ポルフィリェヴィチ・ボロディン（1833～1887）が1881年に作曲した弦楽四重奏曲第２番ニ長調の第３楽章ノットゥルノ（夜想曲)。彼を含むいわゆる「ロシア五人組」の仲間が、多かれ少なかれディレッタント的な傾向のあった中で、ボロディンの場合はとりわけ、音楽はあくまでも余技の域を出なかった。著名な薬学博士としての本業が忙しく、自他ともに許す「日曜作曲家」に留まったのである。青年時代、ドイツのハイデルベルクに留学したのも、音楽ではなく、化学の勉強が目的だった。

ボロディンが彼の妻となるエカテリーナと出会ったのは、そのハイデルベルク留学中のことだった。それからちょうど20年、彼はこの弦楽四重奏曲第２番をエカテリーナに捧げる。この曲の、中でも第３楽章ノットゥルノの甘美きわまりない情感は、ハイデルベルクでの若き日のロマンスの思い出であるというのが大方の推測である。

●弦楽のためのアダージョ(バーバー)

20世紀アメリカの作曲家サミュエル・バーバー(1910～1981)の作品の中では抜きん出て名高い１曲。自作の弦楽四重奏曲第１番の第２楽章アダージョを弦楽合奏用にアレンジしたもので、1938年、トスカニーニの指揮で初演されて評判になり、一躍バーバーの名を高めるきっかけになった。荘重でしめやかな弦の調べが聴き手の心を打たずにはいない美しい曲で、そのために要人の葬儀の報道などでは決って流されるようになり、そんなつもりではなかったバーバーを当惑させたという。ちなみにバーバーの死後、バーンスタインはこの曲を、ニューヨーク・フィルの定期演奏会で、バーバー追悼のために演奏したそうである。

●シチリアーノ(パラディス)

女流作曲家マリア・テレジア・フォン・パラディス（1759～1824）は、盲目のハンディキャップにもかかわらず演奏家としても活躍した人で、とくにピアノの腕前は一流であったらしい。モーツァルトも、彼女のパリ演奏旅行のレパートリーのために、ピアノ協奏曲を1曲（第18番変ロ長調K.456）作曲している。作曲家としてはこんにちではほとんど忘れられているが、ただひとつ、この《シチリアーノ》は有名。シチリア舞曲の独特のリズムの上に、かすかな憂いを含んだ優しいメロディが歌われてゆく。

●弦楽四重奏曲 嬰ハ短調《菊》(プッチーニ)

オペラの大先輩ヴェルディが、たった1曲だが有名な弦楽四重奏曲をのこしているように、ジャコモ・プッチーニ(1858～1924)もまた、このジャンルとまったく無縁ではなかった。比較的よく知られている作品に、《菊》という標題が付けられたこの小曲がある。作曲されたのはプッチーニ32歳の1890年。《マノン・レスコー》によってオペラ作曲家としての地歩を固める3年前のことである。他界したある貴族の追悼が、作曲の動機であったらしい。

曲は単一楽章。悲哀に満ちた実に美しい音楽で、のちのオペラを思わせる音調がいたる所に顔を出すのが興味深い。

●弦楽四重奏のための子守歌(ガーシュウィン)

ジョージ・ガーシュウィン(1898～1937)の子守歌（ララバイ）と言えば、歌劇《ポーギーとベス》の中の「サマー・タイム」があまりにも有名だが、この曲はそれではなく、もともと弦楽四重奏のために作曲されたもの。大ヒットしたポピュラー・ソング《スワニー》と同じ1919年、21歳のときの作で、クラシックの領域ではガーシュウィンの処女作である。モダンで軽い曲調の小曲で、サロンのような場所で演奏された可能性があるが、彼の生前には公にされず、死後、1960年代になってようやく蘇演され、ここにきくような弦楽合奏用の版も併せて出版された。

PHILHARMONISCHE STREICHERSOLISTEN, BERLIN

In 1973, a number of superb string players from three leading West Berlin's orchestra joined to form this chamber ensemble. At present, personnel from these orchestras still make up the core of the group: nine from the Berlin Philharmonic Orchestra, one from the Radio Symphony Orchestra Berlin and two from the Deutsche Oper Berlin. Among them are three concert masters, one from each of these renouned orchestras. Originally known as the "Deutsche Streichersolisten, Berlin", the group performs, under the leadership of Toru Yasunaga, about 20 concerts a year in West Germany and other European countries. In its many configurations, the String Soloists are known for maintaining the individuality of its members as soloists.
Each of the 12 leading members introduced below is an outstanding artist in his or her own right. Among the many awards they have earned as soloists are several first prizes in major European competitions.

Toru Yasunaga - Violin and leader of the Streichersolisten
Born in 1951 in Japan. He joined the Berlin Philharmonic Orchestra in 1977 and unanimously appointed its First Concert Master in November, 1983 by the late Herbert von Karajan and orchestra members. He joined the Streichersolisten in 1978 and has been its leader since 1983.

Bernhard Hartog - Violin
Born in 1949 in West Germany. Former First Concert Master of the Niedersachsischen Staatsorchester Hannover and, since the 1980-1981 season, has been First Concert Master of the Radio-Sinfonieorchester Berlin. He is also a member of the Reger Trios and a teacher at the Hochschule der Künste Berlin (Berlin Arts University).

Tomasz Tomaszewski - Violin
Born in 1951 in Poland. After studies which began at the Warsaw Music Academy and continued in West Germany and the U.S.S.R., he became First Concert Master of the Deutschen Oper Berlin in 1982. Since 1983 he has taught at the Berlin Arts University.

Alessandro Cappone-Violin
Born in 1957 of Italian parents in Luxemburg. He started violin lessons at the age of 11 and entered the Berlin Art University in 1974. He joined the Berlin Philharmonic Orchestra in 1980 and is currently its First Violinist. He is also a principal member of the Scharoun Ensemble Berlin.

Armin Brunner-Violin
Born in 1945 in Switzerland. After graduating from the Basel Music Academy, he was, from 1968 to 1970 a member of the Camerata Bern and also a concert master of the Festival Strings Luzern. in 1970 he joined the Berlin Philharmonic Orchestra where he is currently First Violinist.

Madeleine Carruzzo-Violin
Born in Switzerland. She started violin at the age of seven and entered the Nordwestdeutschen Musikakademie Detmold in 1975. In 1982, she joined the Berlin Philharmonic Orchestra as its first female member.

Kiichiro Mamine-Violin
Born in 1941 in Japan. From the age of six he studied under Shinichi Suzuki as a firstyear student at a school for gifted children. He joined the Deutsche Oper Berlin in 1970 where he is currently First Violinist. Since 1973 he has frequently participated in the Berlin Philharmonic Orchestra and been a member of the Wagner Music Festival Orchestra at Bayreuth.

Wolfram Christ-Viola
Born in 1955 in West Germany. He started violin lessons at the age of six but changed to viola when he was 12. In 1977, he was engaged as the principal violist for the Berlin Philharmonic Orchestra. Today, he also teaches at various international master classes and at the Berlin Arts University.

Siegbert Ueberschaer-Viola
Born in 1930. Born of a musical family in Kreuzburg in the Oberschlesien region of what is now Poland. At a very young age he began studying the viola with his father, the musical director of his hometown. He joined the Berlin Philharmonic in 1957 and

for more than three decades has been active in various quartets and chamber music ensembles.

Jörg Baumann-Cello
Born in 1940 in Berlin, also of a musical family. After graduating from the Berlin University of Music, he joined the Radio-Symphonie-Orchester Berlin in 1962 and in 1966 became a member of the Berlin Philharmonic Orchestra. Since 1977, he has been a soloist and, like Klaus Stoll, double bass, is a founding member of the Streichersolisten.

Richard Duven-Cello
Born in 1958 in West Germany. He began cello lessons at the age of nine. In 1979 he continued his studies at the Berlin Art University and, in 1986, became one of the twelve cellists of the Berlin Philharmonic Orchestra. He also plays with the Scharoun Ensemble Berlin.

Klaus Stoll-Double Bass
Born in 1943 in West Germany. He began his serious studies of the double bass under his father, Karl Stoll, at the age of 12. Three years later he joined the Niederrheinische Sinfoniker. In 1965 he joined the Berlin Philharmonic Orchestra and, a year later, became a leader in its bass section. He is a founding member of the Streichersolisten and, since 1978, a member of the faculty of the Berlin Art University. He plays a superb instrument, the "Brescia", made by Paolo Maggini.

(発売当時のCDより転載致しました。)